

の逐日の融雪水量の総和を求め、グラフに表わしたものが第11図上部の点線である。これと逐日の流出量（基底流量を除いたもの）実線とを比較すれば、比較的良好一致しており流出量が、時間的に遅れていることを示している。この図に示してある100m毎の高度別積雪量は東京管区気象台で実施した「スノーサーベアー」の資料から頂いた平均値であり、流量観測値や大正池の気温等は、東京電力から頂いたものである。

4. むすび

従来、降雪量の観測には、みなその水に換算した量を用いられていたが、積雪量の場合には、たゞその深さが測られているだけであった。積雪深の観測値は交通や災害の面には必要であるが、科学的意義は比較的薄いものである。近時積雪が水資源として重要視せられるようになり、この必要から積雪量を相当水量の値として観測す

る為「サンプリング」等の方法が用いられるようになったけれども、旧来から融雪洪水その他災害の予測等の面からも、積雪の換算水量の値の必要性は認められておりながら、適当な測器が無かったために、積雪深を用いる不確な表現方法で満足せざるを得なかったわけである。この意味において、積雪を相当水量の値として直接に観測することのできる、この重量式積雪量計は、積雪観測用の測器として今後益々広く用いられる可能性あるものと思われる。

終りにこの器械の改良及び実地試験にいろいろ御援助と御指導を下さった小平気象研究所長・水野測器研究部長と高田測候所の方々に、また東京電力KKでは佐久間技師・三村技師・赤羽霞沢発電所長始め多くの方々に御協力を頂いたことを厚くお礼申し上げます。

【書評】 毛利圭太郎著 気象のリズム

B 6 版 218頁 地人書館 1961年4月発行 定価380円
地人書館発行の『天文と気象』に毎月連載した『日本の天候物語』をもとにかなり手を加えてまとめた本である。季節の移り変わりはわれわれの生活と一体のもので、苦しい思い出にも楽しい思い出にも、その季節の気象現象が必ずつきそっている。この本は序文にもあるように「われわれの生活に身近な日本の気象の一年をつづじてのいろいろの特徴を説明した」ものである。

1月から12月まで月毎に、いくつかのテーマをえらんで、たとえば、10月（秋晴れと紅葉のころ）では、みのる秋、10月の台風、秋の長雨（しゅうりん）、秋晴れ、紅葉のころ、秋の霧、春と秋と天気はどう違うか、北日本の秋、関東から中部地方へかけての秋、西日本の秋、というテーマをとり上げて、平易に解説している。季節感を出した写真約100枚、説明図約40枚もあるので、わかり易く読めるし、また約30首の短歌、俳句は歌の好きな人には、解説の後で、楽しいやすらぎを与えるかも知れない。気象の専門家が、日常生活にひたって、このような平易な読み物を書くことは大変良い試みであろう。しかし、慾を云えば、写真には、なくてもがなもの、疑問のもの、もあるが、これらは折を見て直されることだろう。また、自然の探究という点ではもの足りないとしても、著者の意図、「このような生活の中から感じた何物かが、気軽な気持ちでよんでゆかれる読者には少しでもお伝えでき、これによって生活に身近な日本の気象についてすこしでも興味をもってくださるようになれば、大変しあわせだと思っています」は十分に達せられていると思う。

（有木直介）

福井英一郎著 気候学概論

256頁 650円 朝倉書店 1961.

本書は大学の教科書向きに書かれたものである。内容は序論、気象要素、動気候、気候の分布、気候変化、気候と生活、世界の気候 (1)アジア、(2)ヨーロッパ・アフリカ、(3)アメリカ、(4)大洋州および両極地方の10章からなっており、巻末には索引がついている。一言でいえば Haurwitz, Austin 著 Climatology の日本版という感じであるが、最近における気候学の進歩が多くとり入れられており、著者の勉強ぶりが察せられる。

第3章動気候においては物理気象学的な表現が多く取り入れられ、気候と生活の章では生活と直結した大気汚染、災害にもふれており、新しく開拓された気候学の分野がよく紹介されている。後半の4章で世界各地の気候誌を記載しているのは、日本における類書としてははじめてであろう。最近には航空機の発達により世界はせまくなり、各国とのいろいろな交流が盛んになって来ている。このような時代においては日本の気候ばかりでなく、世界各国の気候を知る必要にせまられることが多いが、残念ながらいままでは適当な参考書がなかった。この点で本書はそのような要求に答えるものであろう。

本書はその性質上文献などもほとんどのっておらず、また気候誌にしても定性的な記述にとどまっているところが多い。この点では専門家だけではないといえるかもしれない。しかし、気象学もいちじるしく広く、深くなって来た今日、一般気象技術者も全般に目を通すことはいちじるしく困難になって来た。しかもまた、広い分野の教養も要求されるので、この意味で一般の人はもちろん、気象技術者も一読しておいて損はない著書であろう。

（高橋浩一郎）